

ほとんど知らない オーケストラの話

(第5回)

ドレミのイロハ

東京フィルハーモニー交響楽団
専務理事・楽団長
石丸 恭一

オーケストラが曲を演奏する前に全員が一斉に何やら音を出します。これは通称「音合わせ」と言いますが全員の楽器の音程を一定に合わせるために行っているのです。その時に合わせる音は“ラ”の音でこれは世界共通なのです。

昔からなぜドでなくてラの音で合わせるのかという質問がありますが「人間が生まれた時に最初にオギャーと泣く声がラの音程なのだ」という理由が広く信じられているようです。

その昔、音程などというものはてんでんばらばらだったのでしょうが人の交わりが多くなり社会が出来てくると音楽も共通の音程と音階が必要になりました。そこでそれまでの最低音を基準に音階を作り、それにフランス（イタリア語）で「ラシドレミファソ」と言う名前が付けられました。“ラ”は最初の音（基準）の音だったのです。

「ラシドレミファソ」それを英語にしたのが「ABCDEFGF」で、日本に輸入された時「イロハニホヘト」と名前を付けたのです。“ラ”も“A”も“イ”も最初の音、基準の音だったのです。

時代（文明）は進みピタゴラスは和音を発見し科学は音の伝わりを周波数（サイクル、Hz）で

表し、その数字の理論によって平均律などを生み出し音楽も複雑化して行きました。

並行して音の文字である楽譜（記譜法）の発達などによってドを中心としてオクターブとする音階が定着する事となり現在の「ドレミファソラシド」、「CDEFGAB（独：B=h）C」が定着することになったのです。音楽の歴史上は最近の事なのです。

因みに音合わせの最初の音を発する楽器はオーボエ（チャルメラが原型）という管楽器です。普通管楽器は管の長さを調節することで音程を変えられますがオーボエは長さの調節が出来ない（簡単に音程を変えられない）楽器で、音も倍音の少ない良く通る音（チャルメラの様に）であるからなのです。

決してオーケストラの真ん中に座っているからではありません。

文明が発達すると世の中は複雑化し“とにかくこの世は住みにくい”事にもなるのですが、クラシックオーケストラは人間の音の原点“ラ”を演奏の度に確認しているとも言え、なぜか音合わせを聞くだけで安らぎを感じさせてくれるのです。